# 少年の異世界戦記～ＩＳ編～

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記～ＩＳ編～

【Ｎコード】

Ｎ７０７１Ｙ

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

次に渡った世界はインフィニットストラトス通称ＩＳと呼ばれる汎用性の高い人が着るパワードスーツがある世界であった。

## 0話（前書き）

友達に薦められた小説やアニメを見て創作意欲に任せて書きました。
この小説内で一部のキャラクターの性格が違うと思いますが嫌な方
はクリアバックを推奨致します。

# 0話

ーーーＩＳ学園第一アリーナーーー

《これより入試実技試験を始めます。受験者は対戦相手を量産機又は専用機を用いて戦って下さい。》

「わたしが試験官とはな…相手には悪いが本気で行かせて貰うか」

ピットの中にある侍をモチーフにした感じの機械の前に佇むのは切れ長の瞳に長身でモデル顔負けのプロポーションと美貌を持ち、黒い髪を腰元まで伸ばした女性が学園指定の教員用ＩＳスーツに身を包んで立っていた。

「ちーちゃんが本気を出したら入試の子が可哀想だね～？」

そしてその女性の傍らに立つのはメイドドレスに身を包むピンクの長髪を持つ同い年の様な女性……頭の上…カチューシャと思われる兎耳がひとりでに動いているのは謎である。

「束が他人に興味を持つとは昔は考えられなかったな」

ちーちゃんと呼ばれた女性は感慨深く傍らに立つ女性…束と呼んだ人物に昔の事を喋る

「それはやっぱり〈あの人〉のお蔭かな？」

「いま頃何処で何をしているのだろうな……」

女性はＩＳ越しに遠くを見つめる様にしていた。果たして女性は何を見ていたのかは傍らに立つ束にしか解らない。

「この六年間ずっと探しているけど行方知れずだからね」

「（第二回モンドグロッソ世界大会の時に誘拐された一夏の近くにいた人の証言が正しければ金髪の血の様な瞳を持った人物はわたしは１人しか知らない）そうだな。」

「二回目のモンドグロッソの時にいっくんを見つけた時にあの人かと思ったけどちーちゃんはどう思う？」

「（同じ事を考えていたようだな）確証がなければ何とも言えないな……打鉄の用意は？」

「準備完了してるよ～♪ちーちゃんが思い切り動かしても壊れないから安心して良いよ～♪」

「いつも束の腕の事は信頼している」

「ちーちゃんそれは酷いよ～（泣）」

「あぁもう！引っ付くな！次の受験者はわたしが受け持つんだぞ！」

《織斑先生、受験者の準備が整いました。》

「解った。山田先生受験者のＩＳ情報は？」

《それが……》

女性の声に通信をしてきた山田先生と呼ばれた女性はどう答えていいか戸惑っていた。

「どうした？」

《受験者のＩＳ情報ですが六年前に世間を騒がした機体なんです。》

「……ヴェルフェゴール」

「７つの大罪を犯した悪魔の名前で六年前の〈あの事件〉の時に束さん達が表だとすれば裏で動いていたとされた機体の名前だね。（そしてあの人が乗っていた機体でもあるんだよね？…でも六年経ったいまになって現れたのかな？）」

《御存知でしたか？》

「まぁ…な。あの時の当事者だからな」

《そうですか。》

「機体の情報はあるのか？」

《あ…はい！あります！機体名はヴェルフェゴールで拡張領域や後付け装備が無い事や操縦者を生命（いのち）の危険から守る絶対防御機能が無いなどと慨存するどのＩＳとも違う設計です。装備数はかなりの量なので織斑先生のＩＳに直接送ります》

「解った。山田先生、準備が出来たら合図を頼む。」

《わかりました。》

そして片膝を着いている打鉄のコクピットの様な座席に座る様にして女性が座ると体を固定或いは纏うかの様にして体の肩や脇腹などに機械が取り付けられる。

「ちーちゃん、気を付けてね？もしかしたら」

「解っている。例え相手が〈あの人〉であったとしても手を抜いたりしたら怒られてしまうからな…」

《織斑先生お願いします》

「解った。束は下がってろ」

「は～い♪」

ＩＳを纏った女性の傍から束は素早く離れるのを見てピットに設置されているカタパルトに乗って飛び出した。

「あれか。（全身装甲型（フルスキン タイプ）とは益々持って〈あの人〉を思い出してしまうな。）」

ピットから飛び出した女性の視界に最初に目に入ったのは全身を完全にＩＳで身を包んだ機体見る人物に恐怖感を煽る様な風貌…そして一番の特徴は鬼を模して作られた顔に全身が真紅に塗り潰されている事と背中に背負った形でカーキ色の二枚の巨大な盾である。

「受験者番号２００１番所定の位置に着いたな…今回お前の試験官を勤める事になった織斑千冬だ遠慮は無用だ。全力で掛かって来い

！（もし〈あの人〉なら確実に初手は遠距離からの攻撃の筈……）」

そして女性…ちーちゃんこと織斑千冬と名乗った女性の予想道理に相手は片手に持った突撃銃を乱射して接近してきた。

「（銃撃は囮…本命は）そこだ！」

千冬は誰もいない空間に打鉄に装備されている刀を振るうと甲高い金属音が鳴る。

「不可視の刀を使う事など解っている！」

千冬は相手の刀を切り払ってその勢いに任せて返しに逆袈裟に斬りつけるがその真紅の装甲には傷一つ着けられなかった。

「装甲は昔と同じか！」

千冬はそのまま距離を取ろうとした瞬間（とき）打鉄が動かなくなってしまう。

「なにっ！？」

『禍ノ生太刀（マガノイクタチ）』

何故か身動きが取れない打鉄に対して相手は掌を打鉄の肩に添えると打鉄のエネルギーゲージが急激な減少を始め、あっと言う間に０にされてしまった。

《じゅ、受験者番号２００１番の勝利です！両者は所定のピットに

戻って下さい》

「一体なにが起きたのだ？」

わたしが考え事をしといると相手が手元を何かを振る動作をすると纏わりついていた何かから打鉄が解放されたのを感覚で感じはっと我に帰ると相手はわたしに背を向けてピットに戻って行く最中であった。

「相手の素顔が確認出来なかったがあの戦い方……やはり貴方なのですか…戒翔さん」

千冬は真紅の機体にか細い声で喋ったがその真紅の機体は何も答えてはくれなかった

## 0話（後書き）

御意見や御感想をお待ちしております。

## 第一話　再会の時

ある学園に俺こと黒逸戒翔は神界からこのＩＳの世界にスカリエッティの調査依頼の為に現界していた。……其処までは良い。

『何故、こうなったυ』

「それは俺も同感ですυ」

俺ともう一人の男子…織斑一夏。どうやらコイツは入試の時にＩＳ（インフィニットストラトス）を作動させてしまった事によりこのＩＳ学園に入学する羽目になっていた。

俺が何故この様な所にいるかと言うと…あの変態科学者の提案に乗ったのがいけなかったと言うのが一番の後悔であった。で、何故後悔していると言うと……

（男子２人に対して他の面子が全員女子ってどんだけだよυ）

と、俺が思考にふけていると隣から何かを殴る音が聞こえ其方に目をやるとうずくまる織斑とその傍らに殴ったと思われる黒いスーツを身に纏った女性が立っていた。

「学園内では織斑先生と呼べ」

そう言って織斑と言った女性は副担任の山田真耶の横に立つ。

「これからお前達を鍛えていく、織斑千冬だ。この３年間で使い物になる様に鍛えていくつもりだ。出来なくとも返事をしろ！」

「「はい！」」

そして、その後に続く自己紹介で……

「……以上です！」

まぁ、普通に自己紹介した織斑に対して周りは滑っていたのはスルーしておこう。そして……

「黒逸戒翔くん。」

山田真耶先生に呼ばれて俺は返事をした後に席を立つとクラスの視線が一気に集まるのを感じる。

『黒逸戒翔だ。諸事情によりこのＩＳ学園に来たが解らない事も多々あるが宜しくお願いします。』

「えっと、戒翔くんは専用機を持っているって聞きますが何を持っているんですか？」

『専用機って言うよりはオリジナルに近い物ですね。自身の理論を使ってＩＳとは違う核（こあ）を使っていますからね。ただ、それを教えろとか強要するのであれば抵抗させていただきますが……』

その事に先程までオリジナルのＩＳを持っている事に騒いでいたクラスが沈と静まる。

「いえいえ、篠ノ乃束博士以外に自身で開発した事が本当かどうか知りたかっただけですから」

『それだけなら良い…。』

そして俺が席に座ると織斑から声を掛けてきた。

「やっぱり、戒翔は独学でＩＳを作ったんだな？」

『やっぱり？後は今度教えてやるから取り敢えず……』

「取り敢えず？」

「前を向け…この馬鹿者が」

そして織斑が前を向いた瞬間、呻き声と共に席から落ちる。

「生徒が自己紹介している最中に無駄話とは良い度胸だな……」

「ご、ごめん。千冬姉」

「学園内では織斑先生だ。」

それ以降は無事にクラスの自己紹介が終わり、織斑教諭が教壇の前に立ち口を開く。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そう言った瞬間、クラスの俺と同じく男である一夏を残して他の女子達が黄色い声を叫び教室内に木霊した。

「はぁ、何故わたしのクラスにはこうも馬鹿ばかり集まるのだυなにか？わたしの所には馬鹿ばかりが集まる様になっていると言うのか？」

そんな織斑教諭の言葉は絶叫と言うか悲鳴に近い声にかき消されてしまう。織斑教諭心中お察しするよυ

そして休み時間の時…。

「そこのお二方、少しよろしくて？」

「はい？」

『ん？』

「このセシリア・オルコットが話し掛けたのになんて気の抜けた返事をするの！？」

「いや、俺知らないし…戒翔は？」

『俺も知らないな……』

「学園主席合格でイギリス代表候補生のこの私を知らないですって！？」

「ごめん…」

『まったくと言って知らないな……』

「なっ！？」

セシリアと言う女生徒が驚愕を露わにしている時、神界からの通信が入った為に懐から携帯を出す。

『すまん、電話だ。』

そして、窓際に移動すると携帯を耳に当てながら通信を開く。

《やぁ、其方の世界はどうかな？》

『そこそこ面白いがやはり面倒だな…。お前はこんな世界（ところ）で何を調べたいんだ？』

《なに、その世界のＩＳの技術に興味があってね？君の使っているデバイスとは違う意味で面白いと思ったからだよ？》

『まったく、無限の欲望（アンリミテッドデザイア）……コードネーム通りの思考だな？』

呆れを含む声にスカリエッティは気にしないとばかりに笑う。

《意味合いをそのまま体現出来るのはわたし位だろうね？クローンとしても科学者としてもね？》

『何か解れば此方から連絡を入れる。』

《わかっ……あぁ、そう言えば其方の世界に空間の歪みを観測したからね？そっちの方も取り敢えずは気に掛けて置いてくれるかね？》

『歪み？』

訝しげに聞くとスカリエッティは真剣身を帯びた声でそれに答える。

《何者か解らないが何らかの干渉をして来たと見て良いだろうね。》

『そうか…。取り敢えず、その件に関しては此方でも調べるが、何か新しく解れば連絡をくれ。もしかしたら転生者かも知れないな…。』

《わかったよ。それじゃ、誰かその件での捜査要員で派遣した方が良いかも知れないね？》

スカリエッティの言葉に暫し思考に入る。

『……冷静さと機械に精通している奴と考えるとなると……なのは、フェイト辺りが良いかも知れないな…。』

《確かに……彼女達のどちらかを送った方が君としても動きやすいだろうね？彼女達のどちらかを送る時には連絡を入れる事にするよ。ただ、高町…いや、今は君の奥さんだったね？彼女の悪い癖みたいな物が出ないと良いね？》

『不安要素の１つを言わないでくれぃ』

《ふふふ、ではまた。時の守護神、黒逸戒翔君。》

そして通信が切れるのと同時に携帯を懐にしまうと先程から此方を

睨み付けていたセシリアがズンズンと擬音が付きそうな足取りで此方に近付いて来る。

『はぁ、面倒なのに目を付けられたなぅ』

「そこの貴方……」

そして、セシリアが口を開いた瞬間、始業の鐘が鳴る。

『残念だったね？セシリア・オルコットさん。』

「〜〜〜〜後日改めさせて貰いますわ！！！」

セシリアの言葉を背に受けながら俺は席に着く。傍らには俺が通信中、ずっとセシリアと話していたのか机にぐったりと横たわる一夏がいた。

『……大丈夫か？』

「だ、大丈夫。こんな所でへこたれてたら……地獄が……」

『なんだそれ？』

「あ、いや…何でもないよ？」

『……そうか？』

一夏の言葉に違和感を覚えながらも一応警戒はして置いた方が良いかも知れないな…。杞憂に終われば良いが……

その後も何の問題も無く授業は進んで行き、寮へと向かったが……

『女子ばかりだから当たり前…か。』

決められた部屋へ行く道程には至る所に女子、女子、女子と遭遇するばかりである。

『此処…か。』

俺はそのまま入ると2人部屋の様で同室の人間は既に帰って来ている様子でベッドの傍らに竹刀と木刀が突っ込んである鞄が置いてあった。

『剣道…か。』

それを眺めていると……

「誰かいるのか？私は篠ノ乃箒だ…この様な姿で……」

『此処の寮室になった黒逸戒…翔だっ！？』

「……なっ、何で男が居るんだ！？」

『何でって俺はこの部屋だからって…』

そして、その篠ノ乃箒と言う女生徒の方に振り向いた。……それがいけなかったのだろう。

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

少女は羞恥のあまりに限界を超えた力で戒翔の水月…鳩尾に拳をもらい仰向けに倒れる。
そして、戒翔が最後に見たのは自身で殴った事に対してなのか防ぐなり避けるなりしなかった戒翔に対してかは解らないが驚愕の表情になっていたのであった。

『（まぁ、女子しかいないと言う事を忘れた俺が悪いからな…。）』

戒翔はそんな事を考えながら意識を闇に落とすのであった。

ーーーｓｉｄｅ箒ーーー

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

わたしは恥ずかしさの余りに全力で男に人体の急所の１つである水月…鳩尾を咄嗟的に殴ってしまった。

「えっ！？」

相手が防ぐか避けるだろうと思っていたが相手の男はそのどれも行動に取らずに素直にわたしの拳を腹にうけるとそのまま仰向けになり昏倒してしまった。男の容姿を確認したわたしは驚愕した。

「な、何故戒翔兄さんがいるのだ？」

わたしの問い掛けは気絶させてしまった戒翔兄さんには無意味な物だがそれをせずに居られなかった。ＩＳならいざしらず肉体面では戒翔兄さんがわたしの拳などどうとでも出来た筈だから……

「と、取り敢えず着替えるとしよう／／／／」

冷静になって考えると今の自分の格好はタオル一枚を体に巻いた状態な事に気付き慌てて着替えの胴着に着替える事にする。気絶させた事は悪いがわたしもこのままではまた同じ事に成りかねないと思ったからだ。

そして、着替え終わって手持ち無沙汰に戒翔兄さんが目を覚ますのを待ちながらわたしはその様子を見ていた。

「髪は金髪に目鼻も整っているし、殴った時に感じた筋肉質な体……それに全てを魅入られさせる様な紅と蒼色のオッドアイに落ち着いた物腰…包容力があって理想的な男性としては……ってわたしは何をしているんだぁーー！？／／／／／／／／」

そんな事をしていると気絶させてしまった戒翔兄さんが目を覚ました。

『う……』

「だ、大丈夫か？」

目を覚ました戒翔兄さんにわたしは咄嗟とはいえ、殴ってしまった

事による後ろめたさにどもってしまう。

『いや、大丈夫だ。それに殴られても仕方ないからな…。』

「そ、そうだ！わたしの入浴上がりの姿を見たのだからな！……でも戒翔兄さんなら」

『それは悪いと思っている。元々が女子ばかりだと言う事を忘れていた俺が悪いからな…。それと最後の方が聞こえなかったが何か言ったか？』

わたしの言葉に戒翔兄さんは自分の非を潔く認め、謝罪をしてくる。

「しかし、何故戒翔兄さんと同室なのだ？男女七歳にして同衾せずだと言うのに……」

『それは俺にも解らない…。箒は見ない内に可愛くなったな…。』

「なっ！？／／／／／／／／きゅ、急に何を言い出す！」

『すまん、すまん。先ずは入浴などの時間の割り振りを決めないとだな…。』

戒翔の言葉にわたしも同意見な為に異論はなかった。

「まず、わたしの入浴時間が部活を終えてからになるから7時から8時まで、そして戒翔兄さんの入浴時間が8時から9時だ。」

『部活は剣道か？』

「わたしの目標は戒翔兄さんみたいに強くなる事ですから」

『俺が目標？（やはり記憶にないだけで俺と言う存在がＩＳ世界の一部の人間の中には俺を知る人間が何人か存在している様だな…。）』

戒翔兄さんはわたしの部活を聞くと少し考えている素振りを見せるとわたしの顔を見ると意外な言葉を発してきた。

『その剣道の見学に行っても良いか？』

「戒翔兄さんが？」

『まぁ、な。剣術を嗜んでいるから剣道だとどう違うのか気になってな？』

「剣術って、戒翔兄さんが昔に千冬さんに教えていた？」

『まぁ…そうだな。』

「戒翔兄さんは剣を握る時の心構えと言う物はなんですか？」

『自身を最強たるな常に最高であれ…。』

「戒翔兄さんが良く千冬さんに言っていましたね」

『あぁ、自身の力に傲らず更なる高見を目指す…そんな意味合いを持っているからな。』

そして戒翔は首下から剣状のペンダントを……

「それは戒翔兄さんの専用ＩＳ？」

『ん？そうだが、それがどうしたんだ？ＩＳは皆持っているだろう？』

「専用機は全員が持っている訳ではないんです。極僅かのそれも選び抜かれた者しか持てない希少な物だ。ましてや自作でＩＳを造ったなどと姉さんですら核（コア）のみで他の部分は他の国で作っていたんですよ！」

『其処まで驚く事か？やろうと思えば核（コア）は他の国がどうかは知らないが俺は既に束から教えてもらっていたからな…後はその仕組みを他の管制ユニットとジェネレーターの複合型に仕様を変更して他の物は慨存の技術の枠から外れてはいるな？』

「戒翔兄さんには驚かされ過ぎて反応に困りますよ」

『基本理論もしっかりしてはいるし何重にも張った強固な防御（プロテクト）がされているから俺のＩＳを調べられても問題はない…。』

「もうなんて言って良いか解りませんよ」

『ま、詳しい話は後にして明日に備えて寝るか。』

「そうですね。」

『「お休み。（なさい。）」』

そして二人はそれぞれの寝台に入り眠るのであった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7071y/

少年の異世界戦記〜ＩＳ編〜

2011年12月2日00時51分発行